大東亜戦争全史

服部卓四郎著

原書房

序

宇垣一成

我国が総力をあげて悪戦苦闘遂に一敗地に塗れた大東亜戦争を距ること八年、漸く独立の日を迎へた日本の前途も決して坦々たるものとは考へられない。而して今日日本の進路を決定するのは実に日本国民夫れ自身なのである。由来我国に於ては戦史の研究は多く軍人の手に委ねられ、為に政戦両略統合の見地よりする戦争指導に就ては、広く各界の識者によつて十分なる資料に基きこれを検討して教訓を求むることに於て欠くる処があつたのではないかと思ふ。今日の悲運の一因もここにあつたのではなからうか。平和を念願する我々は、戦争の惨害を再び来さぬためあらゆる努力を惜んではならない。

終戦後今次戦争に関する各種の著述が公にせられ、夫々にその目的は達してゐるとは思ふが、正確な責任ある資料に基く戦争の終始を一貫した政戦両略を取扱つた戦争史は実に此度の服部君の「大東亜戦争全史」を以て嚆矢とし、尨大な此の戦争の概貌を良く整理蒐録し、然も従来門外不出の秘録によつて当時の戦争指導の真相を知らしめ、併せて各方面陸海作戦の経緯に及び、誠に今日識者必読の権威ある書として推称するに足るものと信ずる。

恐らく此書の公刊により世人の今次戦争に対する認識を一段と深刻ならしめ、戦争指導、作戦、軍備其他に就ての是非の批判も一層盛となるであろう。而して戦争間再度に亘り大本営陸軍部作戦課長として心血を注ぎ且つ終戦後戦史の研究に没頭した著者としては、正確な資料に基礎をおいた各方面人士の厳正な批判の的に立つことこそ、寧ろ本懐とする処であらうと思ふのである。（於伊豆長岡松籟荘）

序

野村吉三郎

終戦既に八年、然も戦争犠牲者に対する処遇を始めとして之が跡始末の残されたもの一再にして止まらず。而して権威ある戦争史の編纂も確かにその一であると信ずる。かくの如きは須らく国家の事業として終戦直後よりあらゆる機能を挙げて、その資料を蒐集保存しこれを解明研究して、一は以てこれを後代の国民に伝へ、他は以て再び国家の進路を誤ることなからしむるの資となすべきである。

然るに諸般の事情もあろうが、今日までこれが実現を見ないことは甚だ遺憾とした処である。此時に方り服部君が幾多貴重な秘録と当時親しく見聞体験せる処並に戦後七年に亘る研鑽に基き、一貫した政戦両略に跨がる戦争史の著述を公にせられたことは、誠にその人と時とを得たものとして深くこれを喜ぶと共に敢て江湖の士に推薦せんとするものである。

著者は本書に於ては、努めて客観的に戦争の全経過に亘りその経緯因縁を事実に即し、恐らく今日としては最も信憑するに足る資料を基として記述して居る。今後この戦争を公正妥当の観点に立つて研究せんとするものにとつては真に得難き指針となるものと信ずる。

朝鮮の戦乱を始めとして極東の風雲必ずしも平静なりとは言ひ得ない今日、全日本人は恐らく平和を熱望することに於て敢て人後に落ちぬものがあると思ふ。しかるが故にこそ本書の公刊を契機とし、国民各界各層の士が再び思を新にして民族の一大悲劇たる大東亜戦争が如何にして始まり如何にして戦はれたかを検討省察されんことを切望する次第である。

自序

曠古の大戦、未曽有の惨敗を喫してよりして七年、漸く独立新日本の新春を迎えたが、果して新日本の進路は、直路黎明に向つて啓開せられているであろうか。旧時代ならば、今こそ偉大なる哲人、政治家、科学者を待望すること切なる秋と云うであろう。しかしながら今の世代は、徒らに偉人の出現を期待すべきではない。国民の一人一人が、愛国憂国の士となつて、自ら正しく国家の方向を見究め、決定し且つこれに総力を結集しなければならない。新日本の興亡安危、懸つてこれに在りと信ずる。

歴史は過去より現在、現在より将来へ通ずる国家、民族の道程であり、その間に深き因縁の存することは否定し得ない。我々は常に過去を顧み、現在の立場を認識し、そして将来を達観しなければならぬ。即ち歴史を究明することは、真の日本人として、自己の行手を把握するため不可欠の要件と思う。ナポレオン戦争の時、愛する母国の首都ベルリンが、フランス軍の馬蹄に蹂躙される痛ましき光景を窓辺に眺めつつ講述したと伝えられる、有名なるフイヒテの「独逸国民に告ぐ」なる一書は、ゲルマンの歴史を説いて、真の独逸人にかえれと、訴えたものと謂われている。思うてここに到れば、歴史の持つ重要なる意義及び価値を更めて認識せざるを得ない。

幸か不幸か私は、戦争中二度も大本営陸軍部作戦課長を務めた。まことに微少なる存在ではあるが、いわゆる戦争渦中の一人であつた。又それだけでなく、終戦後中国大陸から、帰還復員と同時に復員庁史実部に、引続き復員局資料整理部長として約六年間勤務し、更に昭和二十二年からはGHQ歴史課に約五年間兼務して、大東亜戦争に関する資料の収集整理並に戦史編纂に専念した。私はこの間、深く戦争なるものについて反省検討を加えて来た。戦争は人類史の悲劇ではあるけれども、或る場合には宿命であるとも云える。

大東亜戦争は、正しく日本の悲劇であつた。戦歿者約二六〇万、戦傷痍約一五万、更にそれに幾倍する遺家族に

思いを致せば悲痛の極みである。しかしそれなればこそ尚更に、悲愁を超え、素裸になつて、この戦争史と取組まねばならぬと意を決したのである。幸い昨昭和二十七年末を以て一切の公職を辞するを得た私は、年来の懸案であつた戦争史編纂の悲願を達すべく没頭したのである。

もちろん個人としては、反省慚愧もあり、又個々の問題については私なりに若干の批判もないではないが、本書は私の回顧録ではない。又その柄でもないことを重々承知している。私は執筆にあたり、私の過去一切に捉われず、飽くまで史実の真相を探究するに公正、客観的態度をもつて一貫するに努めた。従つて明かに過失、蹉跌と思われる史実も、これを叙するに憚らなかつた反面、敗戦の名の下に埋没せられんとしている各戦場における我が陸海軍勇戦の実相を明かにするためには、少なからざる紙面を割くを惜しまなかつた。そして全体として、政戦両略統合史としての内容を整え、政戦略全般の史実解明を意図した。即ち戦争指導、最高統帥、重要なる各方面の作戦及び戦闘を含み調和のとれたものに圧縮したつもりである。

もとより戦争史編纂は大事業であつて、私独りのよくするところではない。僚友諸氏の全幅的協力援助を得て辛うじて為し遂げ得たのである。特にこれらの諸氏は、当時それぞれの主任者であつて、その秘蔵する公的記録、機密日誌や日記など、未だ曾つて公にせられなかつた貴重なる資料を大局的見地から提供されたのである。終戦直後陸軍には公文書焼却の指令があり、建軍以来の重要記録が少なからずこの災厄に遭つて姿を没し、後には又進駐軍に召し上げられる等のことあり、執筆当初多大の困難が予想されたが、心ある諸氏が、当時の困難なる事情を克服しつつ身をもつて保管、これが散佚焚書の厄から護り通した努力の結晶を得たため、御前会議、大本営政府連絡会議及び最高戦争指導会議の公式記録並びに機密作戦日誌等を経とし、終戦後私の立場上知り得た陸海軍の当事者のみならず、各界層に亘る多数先輩知人各位の口述筆記等を緯として、私の最善を竭し得たことは何物にも代え難い喜びであつて、茲に諸氏各位に満腔の敬意と感謝の念を捧げる次第である。

最後に一言附記したいことは、この拙著は文字通り概史に過ぎない。従つて更に更に徹底深刻なる検討を経て、

一層広汎精細を加える必要がある。私は今後とも情熱を傾けて之が完成に努めたき念願であるけれども、畢竟微力菲才の歎をかこつに至るは明かである。そこで私は、私への御叱正を期待するのみならず読者諸賢の御努力により、これが国家的事業への発展を祈念して已まない。かつて幣原内閣当時、一度企てられて、進駐軍の示唆により、中絶の止むなきに至った事実を想起していただきたい。これら国家的努力により、新たに思想、政治、軍事、経済、文化、社会等に亘り、広く集大成され、始めて完全なる戦争史となるのである。

世界は今や、米ソ二大陣営対立の下、三度空前の大戦争来を思わせる緊迫した情勢に立至ったかに感ぜられる。日本独り例外埒外たり得ないことは当然の帰結であろう。好むと好まざるとに拘わらず、世界情勢の一環において、日本自らの進路を決定し、祖国を保全し、民族の生命を維持し、世界の平和に寄与すべき国策乃至国防方針等を確立しなければならぬことも自明の理である。此度私が、多くの批判を受けるであろうことを顧みず、拙速敢えて世に問う所以のものは、たとえ拙い著作でも、時宜に適し、且つ史実を捉えているならば、この秋この際、何等かのお役に立ち得るだろうことを冀う微意に外ならぬ。

秋草既に枯れ、冬天今花影なしといえども、一陽来復すれば、満目又清鮮となる。前途に希望を持ち曙光をみつめて精進しなければならぬ。私は、禍転じて福となることを信じて疑わぬ。

昭和二十八年二月

於世田谷大原の寓居

著者誌す

編者追記

昭和二十八年、いわゆる「服部戦史」が四巻本として鱒書房から出版された。爾来昭和三十一年には八冊に分冊刊行、くだって昭和四十年八月十五日、すなわち終戦二十周年を記念して、原書房が英断もって合本一冊として、世に送り今日に至っている。

もちろんその間、版を重ねるごとに所要の補備訂正を行なってきたが、今回原書房の五版重刷に当たり、部隊号および隊長名を四ヵ所訂正したので、まずは史実には誤りがなくなったと思われる。従ってこの原書房刊のものが「大東亜戦争全史」の定本になったといえるのではなかろうか。

そこでこの機会に、当時著者服部卓四郎（元陸軍大佐　死亡）を中心に、その手足に甘んじて犬馬の労を惜しまず、この戦史の完成に尽くした諸兄を銘記しておきたいと思う。このことは読者諸賢のためでもあり、また故人服部さんの意にもかなうものと信ずるからである。

×西浦　進（元陸軍大佐　34期　現防衛庁戦史室長）×堀場一雄（元陸軍大佐　34期）
秋山紋次郎（元陸軍大佐　37期　前空将、空幕副長）水町勝城（元陸軍中佐　41期　前空将）
稲葉正夫（元陸軍中佐　42期　現戦史編纂官）藤原岩市（元陸軍中佐　43期　前陸将、第一師団長）
原四郎（元陸軍中佐　44期　現戦史編纂官）田中兼五郎（元陸軍中佐　45期　現陸将、東部方面総監）
橋本正勝（元陸軍中佐　45期　現陸将、北部方面総監）×山口二三（元陸軍少佐　49期　前空将補　空幕防衛部長）

注　×印は既に故人となられたことを示す。

昭和四十六年六月一日　　稲葉正夫記